



本年も押し詰まってまいりましたが、リバーキーパーズの皆様方は、いかがお過ごしですか。今年は特に新型インフルエンザの影響で、ウイルスが気になるこの頃ですが、予防接種ならびに、日頃からのうがいや手洗いなどを十分に心掛けましょう。

今回は、「**河川用語解説(霞堤)**」と「**河川用語解説(河川環境)**」についてお知らせします。

土器川リバーキーパーズ通信は、皆様のご意見・ご質問に河川管理者としてお答えしていくものです。土器川に関して、気になっていること、わからないことなど、どしどしご意見をお寄せください。



キーワード: 河川用語解説(霞堤)

○「霞堤」の解説

堤防のある区間に開口部を設け、上流側の堤防と下流側の堤防が、二重になるようにした不連続な堤防のことです。

霞堤には主に以下の3つの機能があります。(右図参照)

- ①洪水時には開口部から水が逆流して堤内地に湛水し、下流に流れる洪水の流量を減少させ、洪水後、排水する洪水調節機能。
- ②平常時に堤内地の周辺田畑や排水路からの排水機能。
- ③洪水時に上流で堤内地に氾濫した水を、霞堤の開口部からすみやかに川に戻し、被害の拡大を防ぐ機能。

急流河川の治水方策としては、非常に合理的な機能と言われており、急流河川である土器川も、古くから霞堤があります。

○「霞堤」の起源

霞堤の歴史は古く、戦国時代の**武田信玄**が考案したと言われていいます。霞堤の名前の由来は、堤防が折れ重なり、霞がたなびくように見える様子からこう呼ばれています。

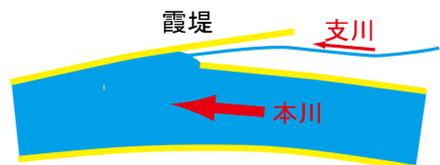


○霞堤の機能(図解)

①洪水調節機能



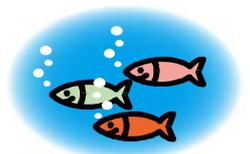
②堤内地からの排水機能



③氾濫水を河道に戻す機能



キーワード：河川用語解説（河川環境）



○概要

土器川においては、河川水辺の国勢調査などで水辺に生息している動植物の調査を、毎年行っております。このとき動植物の生育環境を議論する上で、よく出てくる河川環境の用語の解説をします。

瀬と淵

川の流れが速く浅い場所を瀬、その前後で流れが緩やかで深いところを淵といいます。

瀬には平瀬と早瀬があります。

波立ちのあまり見られないところを平瀬、流れが早く白波がたっているところを早瀬といいます。

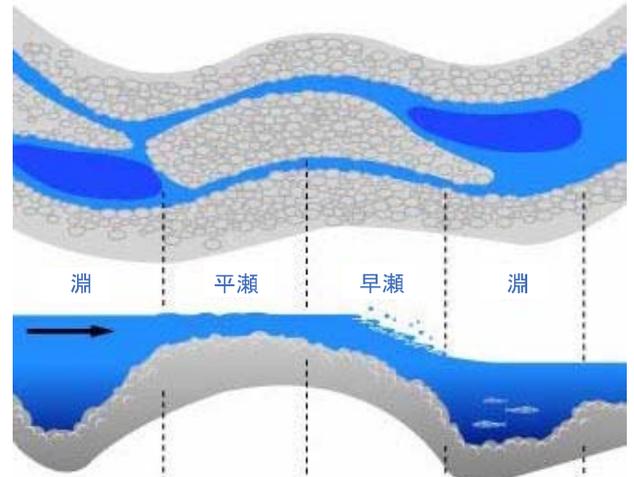
瀬は水深が浅いため、日光が川底まで届き石に付着する藻類がたくさん育ちます。

また、これを食べる水生昆虫が集まるので魚の餌場にもなります。

一方、淵は流れが緩やかで深いため、魚の休憩所にもなります。また、鳥等に追われたときは逃げ場所にもなります。

さらに、コイやナマズ等の大型の魚の棲みかにもなっています。

このため、魚の生活には瀬と淵のいずれもが必要であり、両者が適切なバランスで分布するとともにこれらが連続して存在することが重要です。



	平瀬	早瀬	淵
水深	浅い	浅い	深い
水面	しわのような波	白波がたつ	波立たない
流速	やや速い	速い	緩い
河床の状況	沈み石	浮き石	砂泥など

たまり

高水敷の窪地等では、洪水後、水量が減ると水がたまった箇所が形成されます。これをたまりといい、増水による影響を強く受ける低水敷にあるたまりや、洪水の影響をまれに受ける高水敷にあるたまりに分けられます。

ヨシ等の植生の根元に形成されることが多く、また、本川と直接つながっていない水の入れかえが少ないところとなっています。

たまりには多様な水生生物が生息できることから、河川環境のなかで重要な役割を果たしています。



ワンド

洪水時のみお筋が湾曲して残された箇所や、水制工等による砂州の形成によって河川の通常の流れと分離した箇所等は、流速がきわめて小さい閉鎖的な水域となっています。これらの川の本川とつながっている水がよどむところ(止水域)を、ワンドといいます。

ワンドやたまりは魚類の産卵、稚魚の生育場として重要な場所となっています。



最近では、生物の豊かな生育環境を確保するため人工的にワンドを作るケースが増えているようです。

土器川リバーキーパーズに関するお問合せは



国土交通省四国地方整備局
香川河川国道事務所 <http://www.skr.mlit.go.jp/kagawa/>

〒761-0104 高松市高松町2422-1
TEL:087-844-4315(計画課直通) FAX:087-843-2935

